



水彩画基礎技術（透明水彩）

「林檎」と「洋梨」の制作例を通して



作画協力：武田優作



水入れ、ウエス（布きれ）、パレットとチューブから出した絵具、筆数種

例1:「林檎」



水彩紙とカラー及び白黒図版を用意する。





文字の透かしと、紙を漉く最に出来た凹凸により水彩紙の表面を確認する。

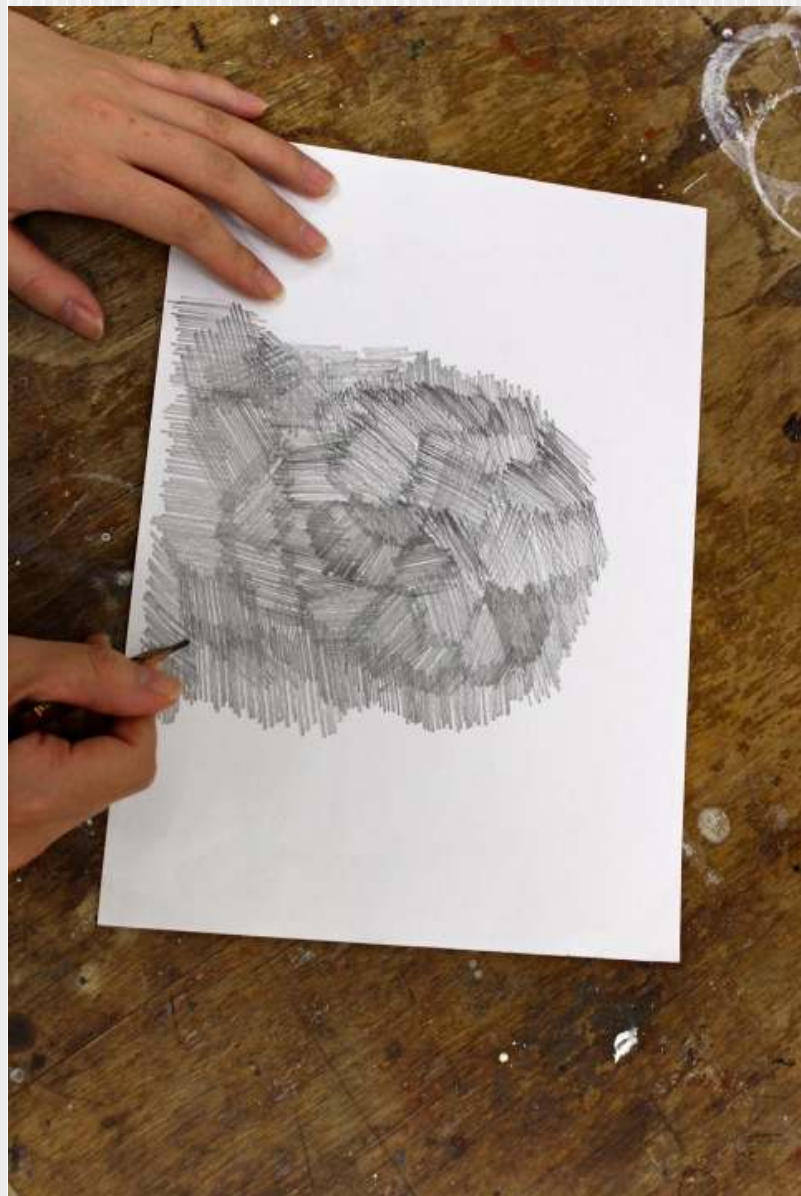


カーボン転写（鉛筆による）

下図の例は ×

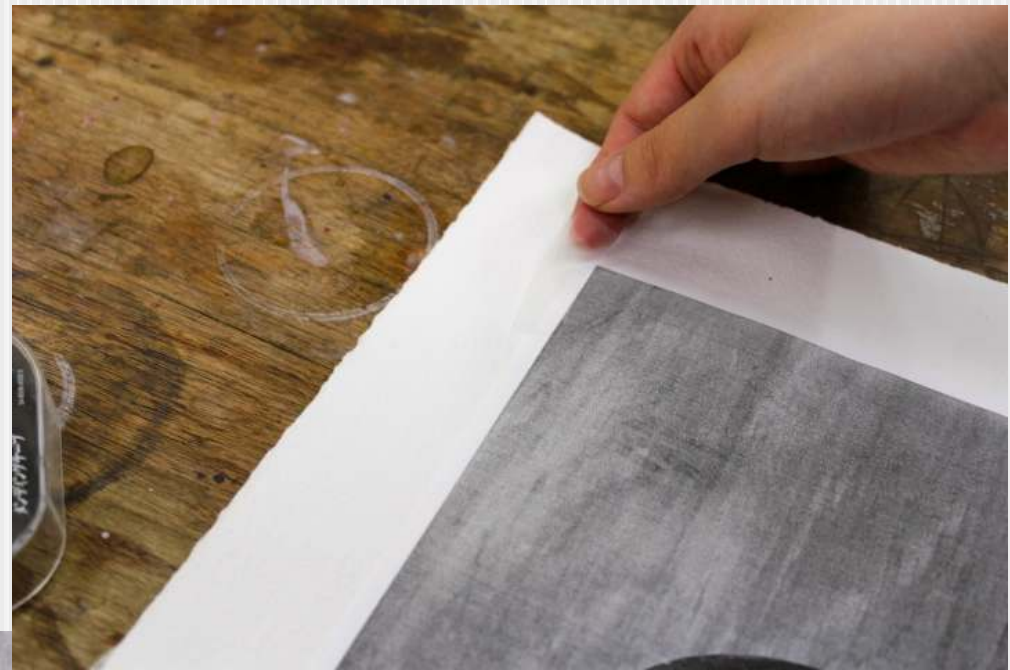


転写の為の白黒コピー紙を裏返し、外光のある窓ガラスに押し当てる、と表の図版が透けて見えるので必要部分を塗りつぶす。
右図のように鉛筆(B程度)で線を整えるイメージで塗りつぶす。

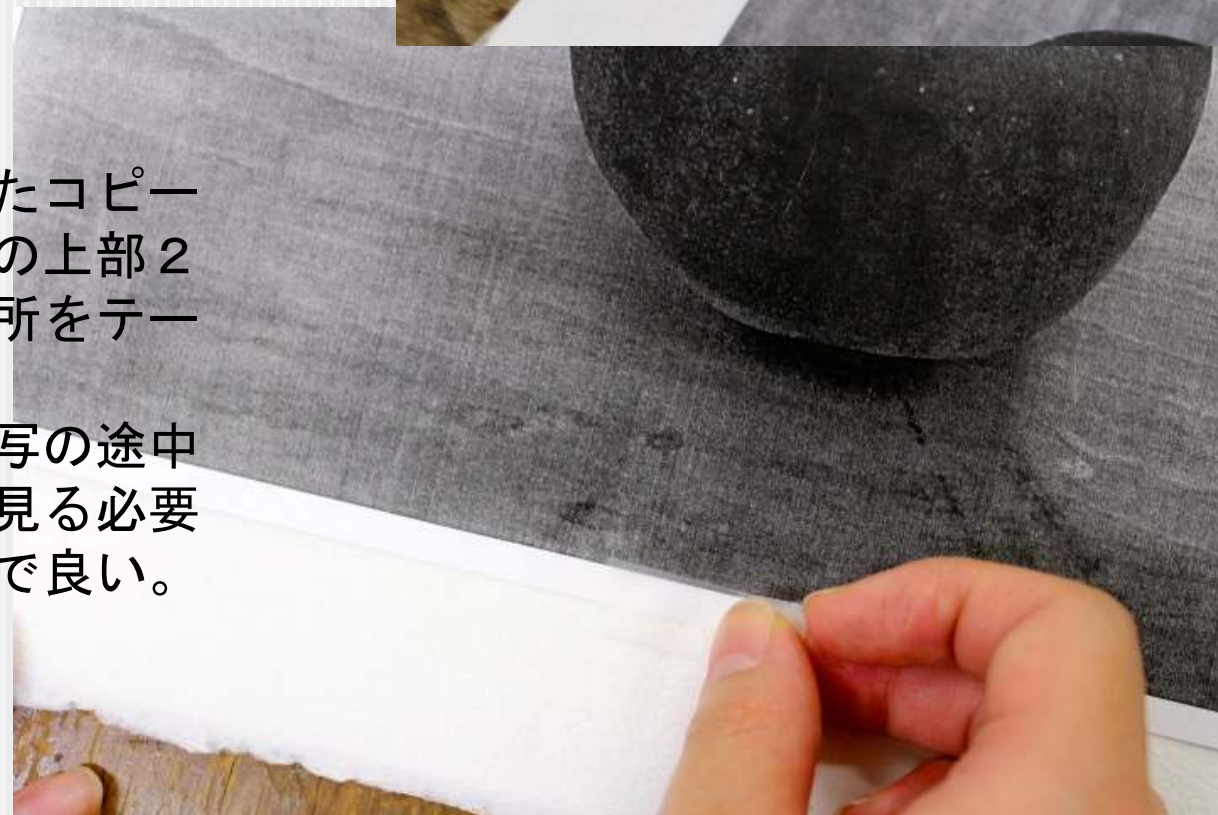


左図の場合、図版の陰影部まで塗りつぶしている。

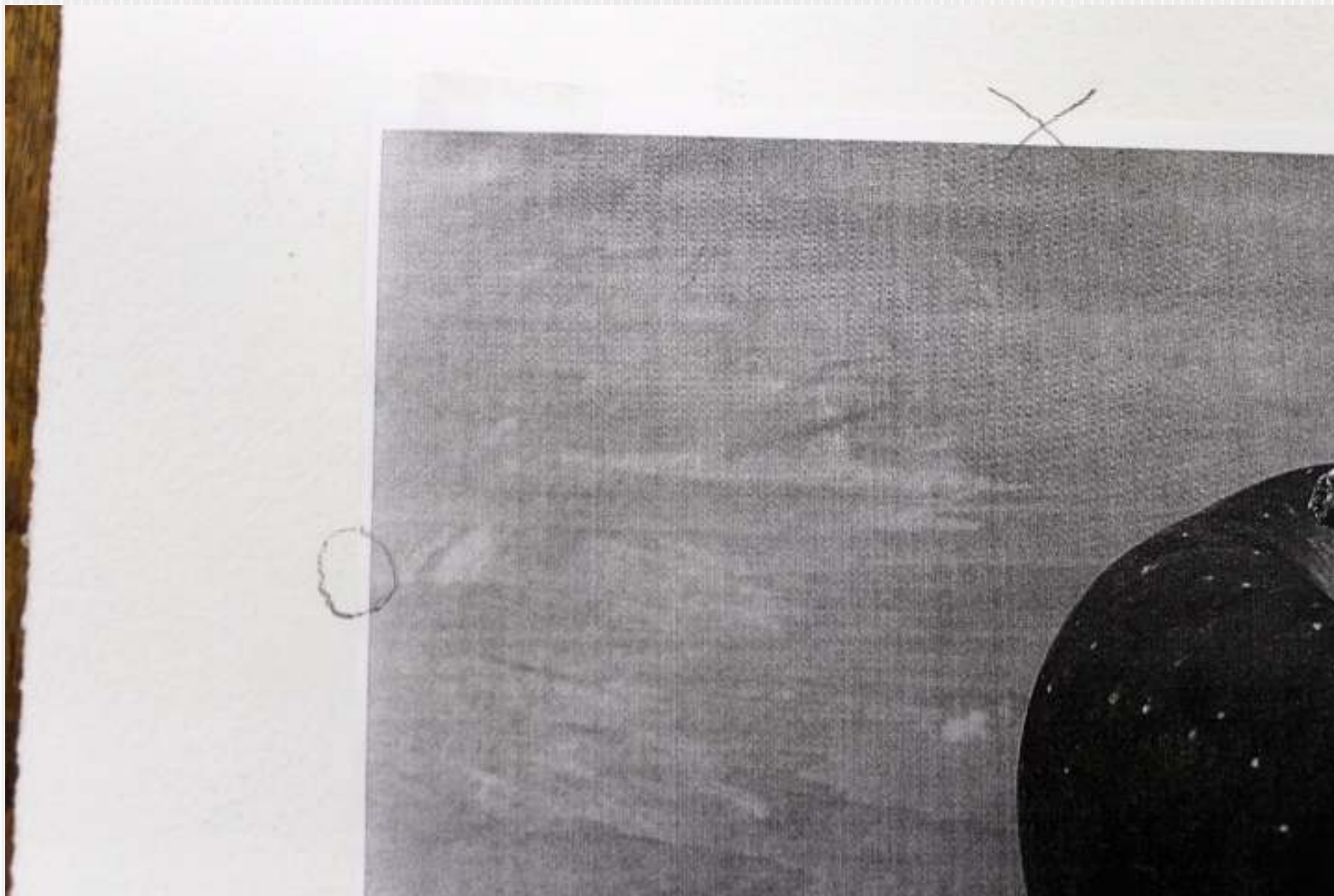
最小限に留めるのであれば輪郭部の塗りつぶしのみでも構わない。
その場合転写が輪郭部のみしか出来ないので賦彩（彩色）は自由になるが、相応の技術が必要になる。



裏面を塗りつぶしたコピー紙を表面にし、紙の上部2箇所と下側を1箇所をテープで固定する。
下側のテープは転写の途中に剥がして様子を見る必要があるので1箇所が良い。



図版と水彩紙に図のように（割り印のように）鉛筆で印を付けておくと、
もしも図版がずれることがあっても、容易に元の位置に戻せる。





ボールペンで転写していくが、
この時、赤や青等の色のある
ものであればなぞった跡が分
かり易い。





輪郭部だけでなく、ディテール（細部）など特徴的な部分を丁寧に描き込んでおくと、賦彩（絵具で彩色）する際の助けになる。



輪郭とディテール、大体の陰影をボールペンでなぞったコピー図版

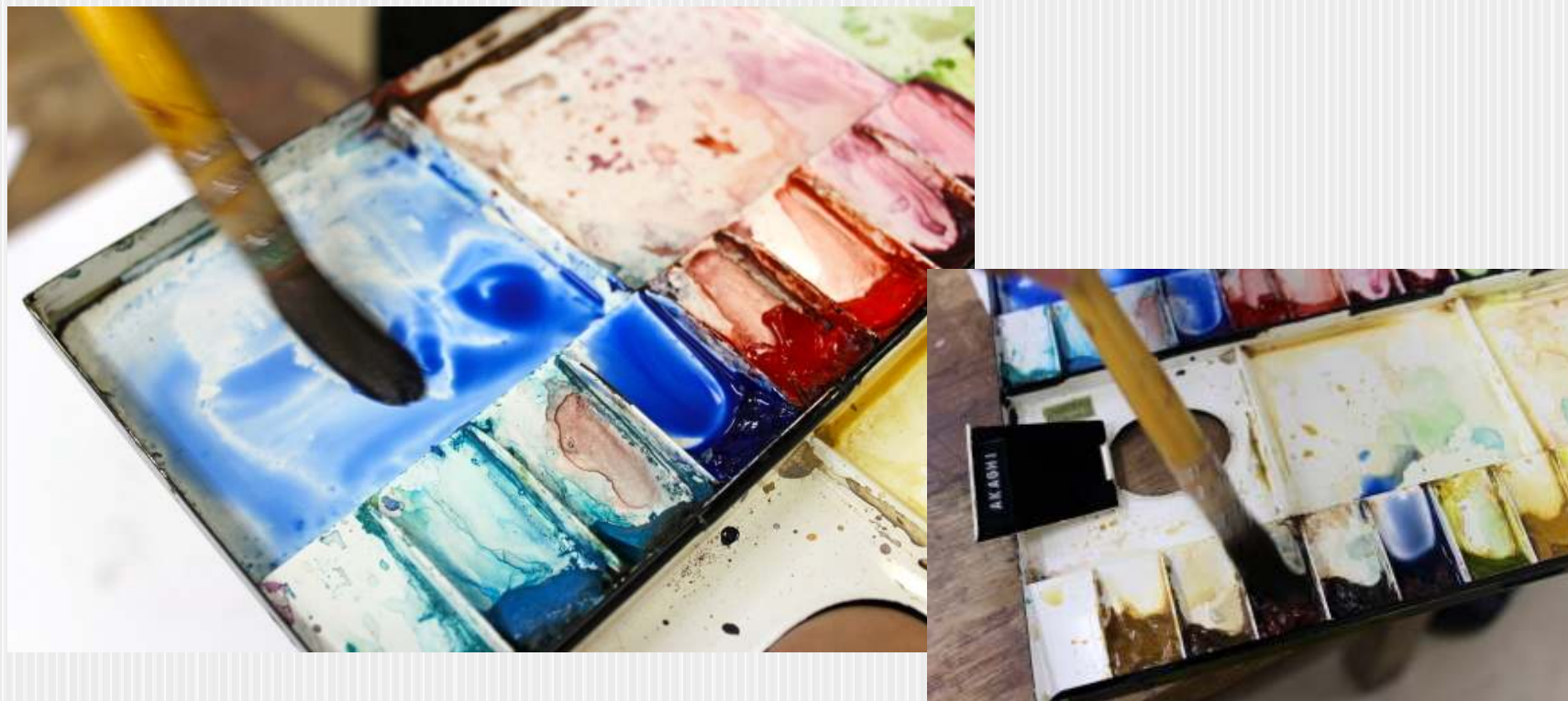
転写用のコピー紙を剥がし、賦彩に必要な要素が紙に転写されているかどうかを確認する。



輪郭線、陰影、林檎の特徴的な要素が転写されている。

透明水彩絵具(単色)で陰影を描く

* ここで云う単色とは、混色をして作り出した「単一の色」のこと



まず、下層描きとして単色の陰影を施すが、ウルトラマリンやコバルトブルーなどの青系とバーントアンバーやバーントシェンナなど茶系を好みの彩度に混色すると賦彩の際の固有色を置き易い陰影が描ける。

下層描き: 立体的に陰影を施す。



まずは林檎の陰の調子を置く。パレットで混色した色に多めの水を含ませ、暗部にゆったりと乗せる（ウォッシュ）。
ウエスで余分な水を引き取りながらグラデーションをつける。

色が水でまだ濡れている間に混色の比をかえた別な色を置いて、調子(トーン)が単調にならないようにすすめる(ウェット・イントウ・ウェット)。



光の方向を意識しながら陰影を施していくとよい。

絵具を泳がせるような気持ちで絵具を置く。



水を十分に含ませた絵具でにじみやぼかしによるグラデーションを楽しみながら、暗い部分から絵具を載せていく。

次に林檎がおとした影を同様にウォッシュで描いていく。下図はパレット上で混色の比を変えて、陰と影の色味に変化が出るようにしている。





ウォッシュとウェット・イントゥウェットを繰り返しながら
陰影を施す。

ここで手を休めて一度乾燥させ、
更に陰影の密度を加えていく。



下層描きにディテールを加える



陰影としての色が強すぎる部分は再び水で濡らしてウエスで上から抑えるようにして拭き取り、丁寧に陰影をつけていく。この段階をどのあたりまで進めるかは完成度をどの程度に想定しているかによる。



林檎の表面のディテールなども丁寧に描いていく。ここ迄を下層描きの陰影部として、この段階で絵具をよく乾燥させる。絵具が紙の繊維に入り込んだまま固着すると、上層描きの固有色（この場合林檎の色）を賦彩しても陰影の色が溶け出しにくい。

上層描き：固有色（ローカルトーン）を陰影部の賦彩の上から被せる。



固有色を薄く乗せても陰影部の色が下にあるので立体感は壊れない。陰影部をしっかりと描く意味がここにある。

全体を観察しながら、明部に色味(色相)を欲しい筆を使って描いていく。暗部には余り加筆していないため、相対的に林檎の右下の陰がやや明るく見え始めている。



形は輪郭部で終わるのではなく、反対側にも繋がっている、という意識が必要である。全体の調子を整えて完成。

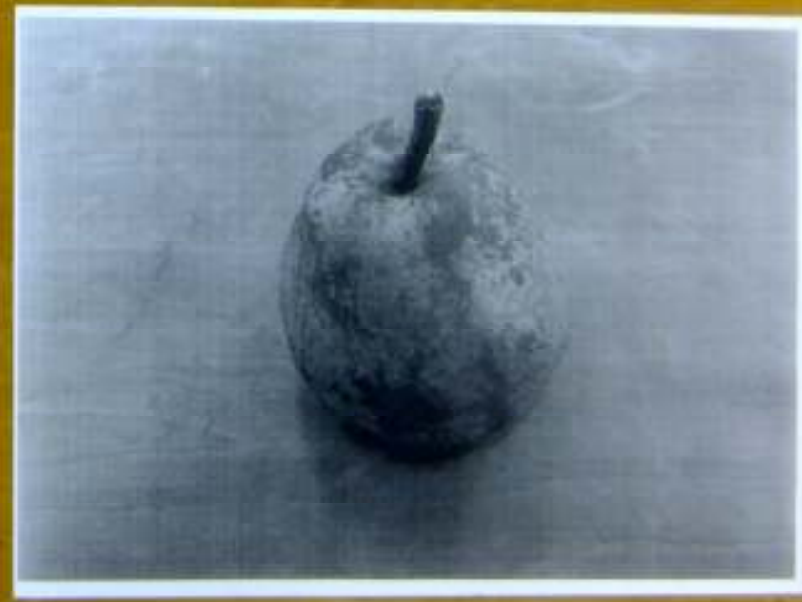


制作：武田優作

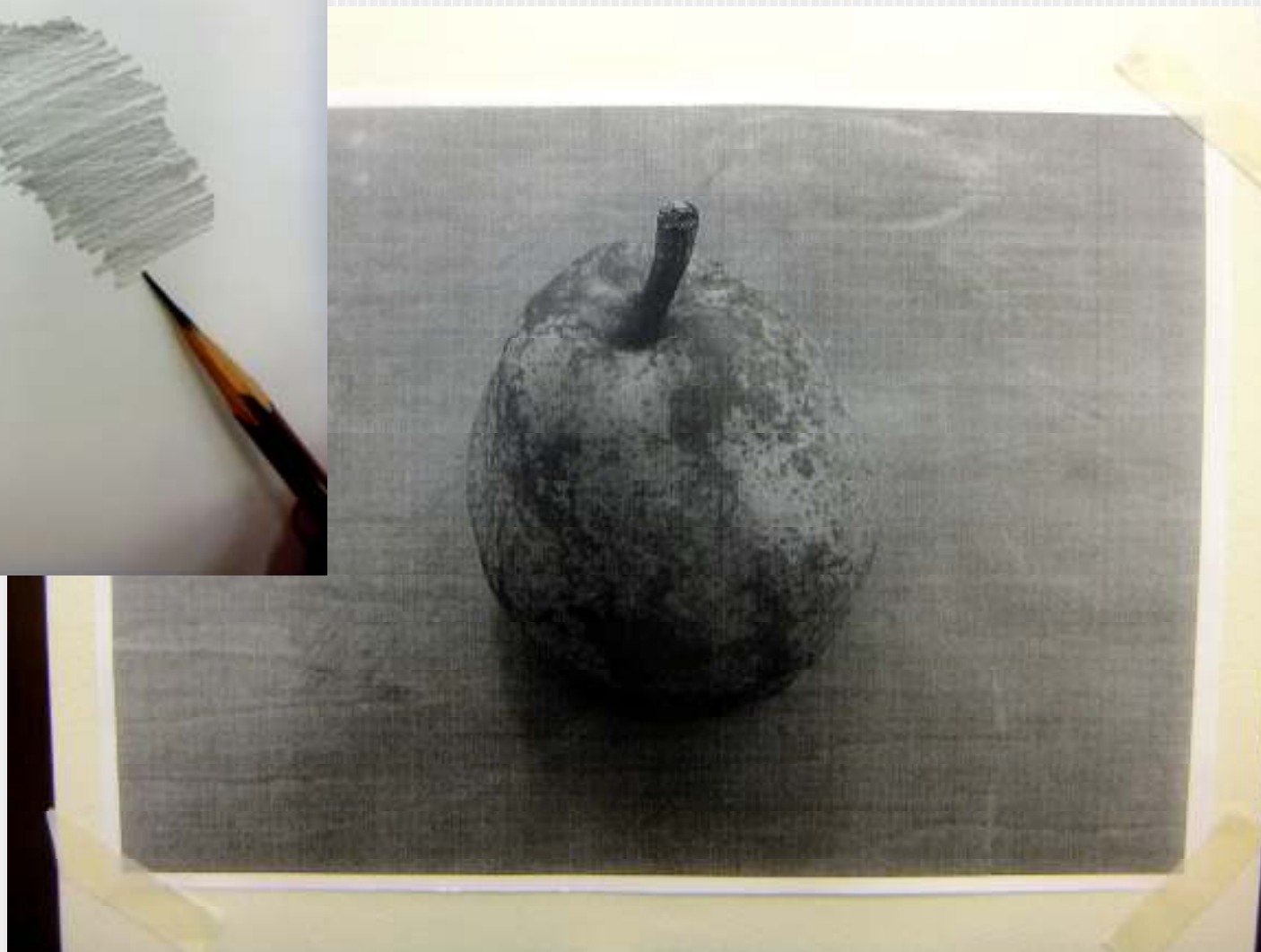
例 2 : 洋梨の制作



カラーと転写用の白黒の図版を用意する。



コピー紙を裏返し、転写する
場所を鉛筆で塗りつぶす。



コピー紙を水彩紙にテープで固定する。ここではテープでの固定のみで印は
付けていない。



色付きボールペンでコピーの輪郭や表面の模様を転写する。



しっかり転写されているか時々確認
をする。このとき、テープの位置が
がずれないように注意する。

転写のみでなく、陰影や必要な部分を補筆しながら陰影をつける。この段階の描き込みを次の下層描きに役立てるためである。



下層描き：陰影とディテールを色で描く



ウルトラマリンとバーントアンバー、バーントシェンナを基本に、他の色味も加えながら、ウォッシュで陰影をつけ、細部を描いていく。



光の方向を意識しながら立体感や洋梨の表情を整える。絵具をよく乾燥させると、この上に上層描きとしての固有色を置いても陰影の色が溶け出さない。



下層描き（陰影）が乾燥した後、固有色を薄く全体に塗っても立体感はそこなはれない。



立体感が出るように光の方向を意識しながら
ディテールを描き込む。



「洋梨」完成 武田優作